

Q₃

抗がん剤の副作用は どうしておこるのですか？ いつ頃からおこりますか？

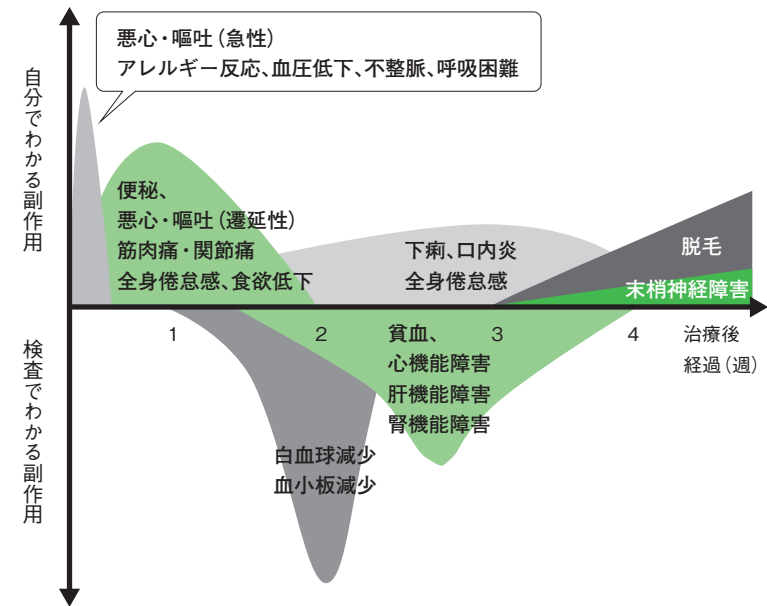
従来から存在する抗がん剤（殺細胞薬^{さつさいぼうやく}）は、天然物質や化学合成物質から選択されたもので、細胞の分裂に障害を与え、最終的に細胞を殺す作用を持ちます。したがって、分裂の盛んな正常細胞も障害を受けることになります。

一般的に、ヒトのからだの中で細胞分裂が盛んな組織としては、口腔粘膜、消化管粘膜、骨髄、毛根などがあり、抗がん剤はこれらの組織に副作用（口内炎、下痢、貧血、脱毛など）を生じます。軽い副作用であれば、自然に改善することがほとんどですが、症状が強い場合にはそれぞれの副作用に対する治療（支持療法といいます）を行います。この支持療法には、口内炎に対するビタミン剤・粘膜保護剤、下痢に対する止痢剤（下痢止め^{しりどめ}）、吐き気に対する制吐剤（吐き気止め^{せいとどめ}）などがあり、これらを使用しながら回復を待ちます（対症的支持療法）。

また使われる抗がん剤の種類によっては、アレルギー反応、強い嘔吐、腎機能障害など重篤な副作用の出現が報告されているものもありますので、予想される副作用を予防する目的で症状出現前（抗

がん剤使用の直前）から支持療法薬を使用する場合があります（予防的支持療法）。予防的支持療法や対症的支持療法を行っても入院期間が延長したり生命に危険が迫ったりするような重篤な副作用が出現した場合は、さらなる対症的治療を行い、症状が回復した後にも抗がん剤の投与量を減量したり他の治療への変更を検討する必要があります。

一方、近年開発が進んでいる「分子標的薬」や「免疫チェックポイント阻害薬」と呼ばれる抗がん剤では「殺細胞薬」と異なった特殊な副作用が出現することがわかっています。これらの抗がん剤を使用する際にはその特徴的な副作用に注意する必要があります。



抗がん剤治療の副作用の種類と発現時期

上記の副作用は抗がん剤治療を受けたすべての患者さんに発生するものではありません。副作用の出現頻度・程度・時期には個人差があります。もともと他の病気で合併症をお持ちの患者さんは、抗がん剤の副作用と合併症の副作用が重なり症状がより重篤になる場合もあります。また副作用の中には患者さんには自覚症状がなく、検査値だけに異常を示すものがありますので、治療後には定期的な血液検査や生理機能検査（心電図など）が必要となります。

以上のように抗がん剤の副作用は多種多様で、検査でしかわからないものや逆に症状でしかつかめないものが多く、その中に重篤な^{じゅうとく}ものも存在します。支持療法を中心にした予防的・対症的治療管理が必要であり、そのためにも患者さんご自身が使用される抗がん剤の副作用について主治医から十分な説明を受け理解しておくことが重要です。気になる症状があれば、主治医、看護師、薬剤師に伝え副作用の早期発見・早期治療に努めましょう。（陶山浩一）

